

## 関東大震災を描く

—絵巻・漫画・子どもの絵—

日 時：2010 年 10 月 30 日（土）10:30～16:30  
会 場：神奈川大学 横浜キャンパス 23 号館 203 教室

開 会 挨拶：橋川 俊忠（非文字資料研究センター副センター長）  
報 告：高野 宏康（非文字資料研究センター研究協力者）  
北原 糸子（非文字資料研究センター研究員）

パネリスト：井出 孫六（作家）  
片倉 義夫（漫画資料室 MORI 主宰）  
新井 勝紘（専修大学教授）  
及部 克人（武蔵野美術大学名誉教授）  
司 会：北原 糸子



### はじめに

神奈川大学非文字資料研究センター災害班では、発足以来3ヵ年にわたり、関東大震災の資料を調査してきました。その成果の披露を兼ねて、今回、展示と公開研究会、それに続くワークショップを開催いたしました。

ご存知のように、1923年9月1日に起きた関東大震災では死者10万5千人という犠牲を出しましたが、このことを永久に記憶しておこうと当時の東京市長らは犠牲者の慰霊と震災の教訓を後世に残すためのシンボルとなる建物を発案し、民間から寄付を募り、「震災記念堂」（1930年竣工、現在の東京都慰霊堂）と震災記念物を展示するための「復興記念館」（1931年竣工）が建設されました。そして、ここに復興事業を推進した東京市、東京府、内務省社会局などの復興に関する資料や市民から集めた震災記念物を展示しました。しかしながら、震災から今にいたる間には、戦前「復興記念館」は一時病院として使われ、戦後はGHQによって接収されるなど、必ずしも造られた時の志が市民の間に発信し続けられたわけではありませんでした。

非文字資料研究センター災害班では、21世紀COE

プログラム事業のなかで行った2006年度からの慰霊堂資料調査に引き続き、これまで学術調査が行われてこなかった関東大震災関連の資料を東京都の了解を経て調査を続けてまいりました。その結果、一巻の絵巻の「発見」がわたしたちに新しい課題と研究へのさらなる期待を与えてくれました。その絵巻とは萱原黄丘作「東都大震災過眼録」でした。この絵巻が見出された当時は傷みがひどく、しかもどのような経過を経てここに収蔵されているのかもわかりませんでした。私どもの調査の結果、この作者は、震災当時日本画家の山内多門邸に寄宿して画業の修行をしていた27歳の青年で、初期の雅号を「白洞」と名乗る人物であることがわかりました。

東京都はこの絵巻を修復し、2010年9月1日の震災大法要の前後約1ヶ月間に一般公開することを決めました。震災関係の収蔵資料を修復して一般公開することはこれまでは考えられなかったことでしたから、わたしたちの調査が「復興記念館」においても新しい動きを導き出したものと考えています。こうした取り組みは今後も継続されることでしょう。

さて、以下では、この非文字資料研究センターの本企画の3本の柱、展示、公開研究会、ワークショップの意図や経過、成果などについてお話をします。